

宗教的真理は「多」か「一」か

ジョン・B・カッブ

わたしは、宗教的な真理は「多くある」という立場を擁護したい。しかし、その理由は、ふつうよく言われるものとは異なっている。ふつうよく見られる立場は、さまざまな伝統に見られる見解は、伝統そのものとその伝統が持つ文化的・言語的なシステムから独立した別のリアリティと比較することはできないがゆえに、宗教的真理は多くあるものである。しかしそれはわたしの立場とはちがう。わたしの立場は、異なった文化的・言語的システムは、複雑なリアリティの多様な特徴に対してわれわれの注意を向けることを要求しているというものである。

その一つの実例として、東洋と西洋の医学について考えてみよう。両者は人間の身体についての異なった関心に基づいている。西洋医学は、身体が持つ機械的な特徴に関心を集中させるのに対して、東洋医学はエネルギーの流れに注意を向ける。そのような

ちがいによって両文化では身体をめぐる経験全体が形成されてきた。しかしながら、東洋医学も西洋医学も、患者のものの見方や文化的・言語的なシステムとある程度関係なく、東洋人と西洋人の両方の身体を癒すために用いることは可能である。

同様に、東洋と西洋の宗教的伝統もリアリティが持つ異なった特徴に関心を向けてきた。東洋の伝統では、経験における普遍的で必然的な特徴にその焦点を合わせてきたが、一方イスラエルから生じた伝統は偶発的で歴史的な経験が持つ特徴に関心を向けてきた。そのことは避けがたいことであるが、そこに導き出される真理は根本的に異なっているのである。

西洋では、それに対して忠誠を求めるいかなる伝統も、その重要な目的はその信奉者たちを意味のあるひとつの歴史の中に位置づけることにある。過去に起こった出来事の全体像は、想像もつ

かないほど広く漠然としたものであるがゆえに、そのこと全体には徹底した選択が含まれている。実証主義者、マルキスト、フェミニスト、ディーブ・エコロジストたちは、自己や救済について全く異なった見解を持っているがゆえに、全然違った選択を行うのである。また、それらの選択はすべて、ユダヤ教やキリスト教あるいはイスラム教の救済の歴史とは、非常に異なっている。しかし、そのような違いによって、真理と誤謬の問題が提起されるのではない。それぞれの選択それ自体は、重要ないくつかの真理(truths)に光を当てている。ただ、そこに導き出された見解が、他の真理を否定した場合のみ、それは誤ったものとなるのである。そのような他の真理に対する批判的な見解は、その見解が真理をどれほど示しているのか、そしてその真理が身近な問題にとつてどれだけ意味があるかに対して関心があるのである。キリスト教徒にとつて、イエスの重要性にたいする信仰の試金石は、原理的にそれを含む物語が、それに含まれるすべてのこと、がらを曖昧にし歪めることなく、その重要性を述べ伝えられることができるかどうかである。他の物語から学ぶことによつて、キリスト教徒たちが自分たちが受け継いできた物語が、かなり曖昧でありまた歪んでいることに気づいた場合には、イエスの重要性を放棄することなくその物語を見直し、そして発展させることがその課題となる。しかし、もしそのことがうまくいっているとすると、そのことによつてイエスの重要性を曖昧にし歪めたりすることなくそ

の内容を伝えていいるほかの物語全部を排除するものではない。

また、真理の多様性ということとは、経験が持つ必然的な特徴に注目した場合にも明らかになる。(不二元論 Advaita)ヴェーダンタと仏教はリアリティについて全く異なる説明をする。ヴェーダンタは、外界が除外された「純粹意識」と呼ばれる一つの経験について語っている。仏教では、経験の個々の契機は、縁起(pratya-samutpada) すなわち全体とともに生起していると説く。

これらの見解は互いに対立しているようであるが、両者とも経験をその根拠としている。ヒンズー教の行者は、意識を止滅することなく、自らを自分のまわりの環境から切り離すことができる。禅の修行者は、自分自身が分別を滅した縁起そのものであるとされる。これらの経験は、その教えの伝統と一致しており、したがって両者において真理である。わたしの理解するところでは、このことは、リアリティとは非常に複雑なもので、この二つの経験についての見解を含んでいるというものである。

東洋でも西洋でも、あらゆる経験の中に恩寵のはたらきがあることに気づいてきた。しかし、このことについて、さきに示した二つのタイプはいずれもあまり注意を払わない。その点、浄土教とキリスト教はそのことに関心を持っている。わたしの考えでは、このような関心はそのことに気づいていようといまいと、リアリティのもうひとつ別の側面を示しているのである。

この会議のテーマは、「比較を超えて」というのである。これまで述べてきた見解によって、わたしは比較を超えていくべき理由は示されたものと思う。もし、さまざまな宗教的伝統が、複雑なリアリティの異なったさまざまな特徴にたいして関心を持つならば、われわれはそれらがわれわれにとって価値のある真理を示してくれるのではないかと期待しつつ、それらのことすべてに注意の目を向けるであろう。仏教徒あるいはキリスト教徒としての信仰を持つことによって、われわれが手に入れることのできる真理がどの程度のものであれ、われわれが他の人々から何か学ぶために対話を行うことには、それなりの正当な理由があるのである。他の人びとから何か学ぶためには、その人びとがわれわれから何か学ぶ必要は必ずしもないけれども、たいていは学ぶことと教えることの両方を求めている。

この会議におけるわれわれの関心は、浄土教とキリスト教についてであるが、わたしは両者にとって重要な課題である *faith* 「信」について考察することによって、比較を超えてということを明らかにしてみようと思う。信心についての浄土教の議論をたまたま知ることによって、わたしがどれほどキリスト教の *faith* 「信」についてのわたしの理解が満たされてきたかを示すことによって、そのことについて、一人のキリスト教徒として省察したいと思っている。

キリスト教において *faith* 「信」という言葉は多くの意味を含

んでいる。それは時には信じられるべきものを指している。キリスト教徒にとって、そのような信仰が持つ形式の正しさは大切なことであり、軽んぜられるべきものではない。しかし、ほとんどのキリスト教徒たちは正しい信仰それ自体によってすぐわれるとは思っていない。

しかし一方、イエスの贖罪の死や神の性格といった主要な信仰内容を実存的に受け入れることによって救われるとも考えられる。そのような信仰は神あるいはキリストへの信頼を喚起し、そしてそのような信頼はしばしば *faith* 「信」による救済と同じだとされる。神と同一視されるような頼るべき存在がいると信じることは知的に困難であるので、多くのキリスト教神学者たちは、そのような信仰とはちがうかたちで *faith* 「信」を定義してきた。すなわち、*faith* 「信」とは誠実さ、真の実在あるいはあかしであると解釈されてきた。そして、これらは個々の信仰者の内面を示すと考えられているのである。

浄土と出会ったことによって、わたしはわたしがそれまで理解してきたような意味での信頼や内面性というものが、西洋の二元論的で実体論的な発想を前提としていると気づいた。西洋では個人は自己充足的な存在であるとされる。すなわち、この自己充足的な個人は他の自己充足的な個人との関係の中で、何かを信じているか、あるいは内面的にそのような関係から独立した状態にあるかのいずれかとみなされる。しかし、その両方とも満足の行く

理解ではない。

それに対して、信心では、慈悲深い他者が信者の根幹に関わっている。信者も慈悲深い他者も、いずれもそのような関係と無関係には存在しない。その場合、その一方が果たして内在的なものか超越的なものか、あるいは内面的か外面的かといったことを尋ねることは意味のないことである。なぜならば、その問いは否定したはずの実体論を前提にしたものだからである。

わたしは、キリスト教の *faith* 「信」は信心との類比によって、キリスト教の神学の多くが持っている二元論的、實在論的範疇より、はるかによく理解されうると確信している。このことによって、自己の内なるキリストそしてキリストの内なる自己を語るパウロがわれわれにとって身近なものとなる。つまり、浄土教思想との出会いは、比較ということをはるかに超えてこのキリスト教徒へとつながっている。

一方、キリスト教の *faith* 「信」の解釈は、浄土教の大部分の教えで説かれる信心のはたらきについての見解を広げうるように思える。浄土教の思想家たちには、キリスト教と出会うことによって、われわれが現在直面しているあらゆる複雑な問題と信心のより直接的な関係を、これまでの見解以上に展開させることが可能となるように思われる。(嵩 満也訳)

(クレアモント大学院)